

# 第7回平和市長会議総会 分科会Ⅰ

被爆者から未来を担う子どもたちへのメッセージ

—紛争の平和的解決のために—

2009年8月9日(日) 14:00~17:00  
長崎ブリックホール国際会議場

- チェアパーソン    ステファン・ヴァイル (ハノーバー市長・ドイツ)
- 被爆体験講話    内田伯「私は地獄を見た」
- 発 言 者    ジャン・ジョエル・レマルシャン (ショワシー・ル・ロワ副市長・フランス)  
                 中田博幸 (札幌市副市長)  
                 美帆・シボ (フランス平和自治体協会 (AFCD RP)・フランス)  
                 ロバート・ハーヴェイ (ワイタケレ市長・ニュージーランド)  
                 エスティファノス・アフォウキ・ハイレ (エリトリア駐日大使・エリトリア)

## 開会

### 議長 ステファン・ヴァイル （ハノーバー市長・ドイツ）

皆様、こんにちは。分科会 I へようこそ。昼食後の会議はなかなか大変だと思っております。ドイツ語では” soup coma” と言い、皆様が眠くなることを心配しております。私は、ハノーバー市長のステファン・ヴァイルと申します。ハノーバーは、50 万人都市で、1980 年代初めから平和市長会議に参加していますので、第一世代の参加都市であると思います。そういうことから、本日、ここで議長を務めることをたいへんうれしく思っております。

### 被爆証言者による講話

### 議長 ステファン・ヴァイル （ハノーバー市長・ドイツ）

分科会 I では、長崎の被爆地としての経験を踏まえ、世界中の様々な紛争を解決するための和解の可能性について語り合いたいと思いますが、それに関しては、被爆者の証言が非常に理想的であると思います。われわれは、この経験をどのように次世代に伝えていけばいいのでしょうか。われわれは、どういう戦争を経験し、そこからどのように復興したのかということ、是非伝えていかなければいけないと思います。このことをより良く理解するために、まず、実際に長崎で原爆を経験した方のお話を伺いたいと思います。

内田伯さんは、中学生として工場に動員された方です。今日はようこそお越しくださいました。では、どうぞお話しください。

### 被爆証言者の講話 「私は地獄を見た」

#### 内田伯

ご紹介いただきました内田伯と申します。非常に大切な平和市長会議で、私のような市民にお話する機会をお与えいただきまして、深く感謝いたしております。私がこうして今ここに立っていること自体、不思議な感じもいたしますけれど、とりあえず私のこれからの話をお聴きください。タイトルは「私は地獄を見た」ということで話をさせていただきます。

思えば、あの戦争は、私にとって悪夢としか言いようのないもので、5 人もの家族の命を爆心地で奪われた者にとっては、なおさらであります。私の家は爆心地の松山町の、現在、三角のタワーが立っているところから数十メートル離れたところであって、そこに家族が住んでいました。

当時の私どもは食料不足が想像以上に深刻の度を増す中、キップ制によるわずかばかりの生活物資の供給がありました。戦争の話と同時に、私たちには食べ物がなく、飢えていたということも申し上げておきたいと思います。そういう中で、定期的に長崎市近郊へ食料の買い出しに出向いていたのが実情です。それによって長崎市民はかろうじて空腹を満

たしていました。

それでは、原爆投下の 1945 年 8 月 9 日の話に移りたいと思います。

私は中学生でしたが、私たちの学校では 3 年生になりますと、軍需工場といって兵器を造る工場に動員学徒として行っていました。そういうことで、軍用品を造る工場に出かけるのが日課となっていました。その日の朝、一緒に眠っていた父に、「何時ですか」と時刻を聞いた時は、図らずも父の腕時計は午前 6 時 10 分になっていました。それはなぜか。

8 月になりますと、本当に毎日毎日空襲があり、8 月 8 日の午前 0 時ごろ空襲警報が出て、私たちは近くの防空壕に逃げ込みました。その防空壕はどのような場所かというと、松山町の高台に平和公園があり、そこに色々な建物がありましたが、その西側の斜面に、爆弾が落ちた時、身を守るために逃げ込むシェルターの役目を果たしていた防空壕があったのです。その朝、そこに私たち家族 6 人が逃げ込んで、1 時間後にわが家に帰って来ました。その後、父の時計が止まっていたことに全く気付くことがなかったのです。

今の時計は電池時計ですが、当時はゼンマイが付いていまして、ゼンマイを 2 時間に 1 回はきちんと巻き通しておかないと、時計は止まってしまう。今の電池時計ではそんなことはありませんが、当時は世界で有名なスイスの時計でもそうだったのです。

その日の朝、芋の雑炊を食べて急いでズックの靴を履いて、何気なく玄関に掛かっていた柱時計を見ました。すると、既に午前 7 時を過ぎていたのです。先程申しましたように、6 時 10 分からすると 50 分間、時計が動いていなかったということになります。それはゼンマイのなせる技だったことが後で分かりました。

そうした中、遅れてはならないので、慌てて家を飛び出しました。遅くなったのは父の責任みたいに父を詰ったことを覚えています。しかし、それが、私の人生の少年時代において、最後の父との会話になろうとは知る由もありませんでした。今日なお私の脳裏には、このことが重い荷物となって残っています。思えば、父を含めて家族 4 人は、松山町の 13 番地で、あっという間に焦熱の、超高熱の地獄の中で命を奪われたのです。

私は、そうして大橋の工場にようやく到着できましたが、午前 8 時 30 分ごろ、米軍機の到来を知らせる空襲警報が鳴り始めたので、私ども中学生は、この工場の東の門より 300 メートルほど離れた山手の防空壕の前庭に避難のために集合いたしました。

ここで、これは日本の科学者たちもほとんど知らなかったことですが、「3 日前に広島に投下された新型爆弾は、核分裂を応用した原子爆弾に違いない」と、当時としては驚くべき話を、私の担任であった化学の先生がされたのです。私たちはたいへん驚きました。しかし、それが 3 日後に私たちの頭上で爆発することを考える能力も知識も持ち合わせていなかったのです。

しばらくして空襲警報は解除になり、皆、列を組んで職場へと戻って行きました。工場内は、早く着いた人たちによって、既に工場の機械は唸り声をあげて回転していました。職場の私の持ち場で、精密機械の部品の仕上げをするため、バイス台に向かって部品を磨く作業をしていた時、突然、中空から高い天井を通して、ピカッとそれは恐るべき強烈な

閃光が走りました。その時、屋根は石綿のルーフィングで光を取り入れるために片面は板ガラスで覆われていましたが、爆風によってガラスが破碎し、いっせいに地面に向かって降り注いだのです。

私は、本能的にその場に伏せ、全部の指で頭を覆いましたが、V字型に開いている指の間から、直接、大小様々のガラス片が後頭部に突き刺さって、たちまちにして、その一部が頭蓋骨に達するまで頭が切り裂かれました。「あ、自分はこのまま死ぬのかな」と思った時、幸いにも額に強く日本タオルを巻いていました。目にまで下がってきた血を瞼の上の方に上げようとした時に、日本タオルに手があたり「あっ」と思って、それを取り外して、頭にタオルを当てました。私は必死になって止血しようと試みましたが、手の施しようもなく、最初に血を吸い取ったタオルは、そのままではもう手をつけられませんので、雑巾を絞るように、布巾を絞るようにしてタオルを絞りました。しかし、頭に当てますと、また血をどっぴり吸い取って、また絞る。また頭に当てる。また絞る。私は「これで死ぬのかな」と感じました。ちょうどその時、幸運にも救援隊がやって来ました。先程申しましたように、手の施しようもなく、血にどっぴり染まったタオルを3回まで絞ったことを覚えていますが。

気が付いた時には、赤茶けた飴のように曲がった鉄骨や電線などがクモの巣のように垂れ下がっていました。すぐ近くには、動けないままの人々の遺体がたくさん転がっていました。

その後、そこから900メートル離れた所に地下工場があるのですが、そこから救援隊が私たちの工場に向かってやって来て、私は真先に発見されて、担架で近くの小高い丘の上に運ばれて、そこで応急手当を受けました。きちんとした外科用の薬ありません。山の上に生えているヨモギを潰して、その汁を頭に当てて、仮の包帯をしてもらった記憶があります。

そういう中で、やっと出血も途切れて、助かる希望がほのかに湧いてきました。いったん出血が止まったら、急に今度は松山町のわが家が気になってきました。もちろんそういう体ですので、ふらつきながら手をついて丘を下りて、小さい川を渡って、鉄道線路にかりうじて出ました。線路伝いに、ようやく松山町の交差点に近づくと、そこには焼け崩れた瓦があり、電車の停留所付近に転がる白骨化したいくつもの遺体の上に、かなりの厚さの灰が降り積もり、辺り一面本当に砂漠の様相を呈していたと言っても過言ではないと思います。この灰がたぶん相当量の放射能を含んでいたはずです。

そして、午後1時過ぎであったと思いますが、私たち被爆者を救援するために第1号の列車が線路の上を走ってきて、私たちの近くに到着しました。大橋というところが現在もありますが、大橋の鉄橋から500メートルほどの田んぼの土手の両側に、全身焼けただれた重症者や、火傷のために既に皮膚が垂れ下がってしまった負傷者がひしめいていました。

私もやっとのことでその救援列車に乗り込むことができましたが、午前中に会ったばかりの仲の良かった同級生の中村春雄君が一足先に乗ったらしく、顔と言わず全身が真っ黒

く焼けておられ、それは悲惨としか言いようのない姿でした。私は、その状況を見て絶句しました。彼の目は既に垂れ下がっていて、最初は私の声に気づかなかったようです。そして、彼は、全身血だるまになっている私の体の一部に触れて、「一緒に頑張ろう。生きるんだ」と励ましてくれましたが、彼には刻々と確実に死が迫っていました。これは、原爆の荒野に身をさらした者たちの文字通りの生と死を分けた最後の出会いとなりました。

次は、私が母と二人で生き残った話をさせていただきます。

その日、暗くなって、救援列車は、大村駅の一つ手前の岩松駅に着き、地元の消防団員の方々によって、私は、八幡にあった海軍病院まで担架で運ばれました。

翌朝、病院のベッドが次から次へと廊下に運ばれている物音で目が覚めました。同じ部屋の他の人たちは早く治って退院し、私だけが取り残されたことを嘆き悲しんでいました。しかし、しばらく経つと、周囲の様子がなにかおかしいことに気付きました。そこで、近づいてきた看護婦さんに、恐る恐る尋ねてみると、「6人の方は皆お亡くなりになりました」と告げられました。

私はびっくりして、体が震え出しました。ベッドの中を見ると、ハリネズミのように体に刺さっていた大小様々の無数のガラス片が落ちていました。そうした中で、私はまた昏睡状態に陥りましたが、その病院で最高の治療を受け、命を取り留めることができました。頭を13針ほど縫っていただいたことを覚えています。

そして、岩松駅からわが家に帰るための汽車にどのようにして乗ったのか、不思議と現在まで覚えていません。道の尾駅で下車し、わが家の在った松山町に向かう途中の住吉トンネル工場の入口近くの前で母とばったり会ったのです。余りの偶然に、お互いに夢ではないかと思いました。

私は、病院でもらった薄い浴衣と、ワラで編んだ草履を履いて歩いていました。母が気遣いのように私に取りすがって喜んだ様子を覚えています。母は、あちらこちらの収容所を大分探し回ったけれども、分からなくて疲れ果てて、暗い所でウトウトとしていたところ、夢の中で私の生暖かい血がハラハラと流れてきたといいます。その時、母は私がどこかに生きているのではないかと思ったと言いました。

大橋町に再び近づいた時に、わが家が蜃気楼のごとく浮かび上がって見えました。それは全く空しい期待でありました。私は1週間弱病院に入院し、治療を受けていたのですが、その間に道路もきれいに片付けられていました。しかし、未だあちらこちらに引き取り手のない遺骨や遺体が転がっていました。また、松山町の一番北端の私が良く知っている桜井さんの敷地の中には、なんと死体さえ見えず、別のコンクリートの土間を見たところ、六つの頭蓋骨が天をにらむように並べられていました。首から下の骨は全くありません。恐らく高熱で焼却され、粉末化したのではないかと思います。

その後、私はわが家の跡に立っていました。父の遺体の一部以外は未だ分からないと、母は言っていました。誰にぶつけようもない怒りがこみ上げてきました。こんな馬鹿げたことがあっていいものかと。

すぐ下の弟は渚国民学校高等科の1年生でした。1945年8月1日にアメリカの飛行機がやって来て長崎駅のホームに爆弾をたくさん落としたのですが、その時の長崎駅の惨状を見た弟は早く疎開したいと父に訴えていました。すると、父は国家体制の中に組み込まれていたからでしょう「安全な所に疎開するというのは、おまえは非国民だ」という言い方を自分の子どもにしていました。

その頃、大都市圏では集団学童疎開が急がれていましたが、地方都市の悲しさと申しますか、疎開が正当化されていなかったのです。そして、父は天皇崇拝者でありました。最後まで皇国（天皇が統治する国家）の不滅を信じて疑いませんでした。天皇は当時は現人神といって、人間の姿に身を変えられた神様であるという思想が日本の天皇制を維持していたのです。考えると非常にナンセンスなことだと思います。なぜそんなことを言うのかと、なぜ私は疑いの目でものを見なかったのか。しかし、そういうふうに天皇について考えることは非国民であるという大前提がありました。そして、疎開を拒否した父のために、父を含めて家族4人が運命を共にしたと言えます。返す返すも無念でなりません。

ここまでで私の被爆体験の講話を一応終わることにします。

最後に、世界平和へのメッセージということで、私の考えを申し述べます。

先の大戦中の原爆使用が「悪」であったことは、何人も否定できないはずであり、今、必要なことは、広島と長崎の悲劇が再び人類の上に繰り返されてはならないということです。そして、今日、広島、長崎に課せられた使命は、原爆の恐ろしさを、政治的なプロパガンダとしてではなく、原爆被爆者の痛ましい体験が、世界平和へのメッセージとして広く世界に伝わり、人間に人間の愚かさを忘れさせないようにすることに尽きるのではないかと考えています。

以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。サンキュー ベリー マッチ。(拍手)

#### **議長 ステファン・ヴァイル (ハノーバー市長・ドイツ)**

内田さん、証言をありがとうございます。今朝、われわれは感動的な式典に参列しましたがけれども、今改めて印象的な被爆者の証言を直に聴くことができまして、大変感謝しております。本当にこれ以上の貴重な証言はないと思います。このような重い証言の後でディスカッションをするのは、なかなか難しいと思いますので、まず、ここで、内田さんに皆様からご質問があれば、それを受けたいと思います。どなたか内田さんにご質問はありますか。ないようですので、それでは、これで終わりたいと思います。内田さん、ありがとうございました。

## 参加都市の発言

### 議長 ステファン・ヴァイル （ハノーバー市長・ドイツ）

次のコーナーでは、次世代に伝えるべき問いについて、お話を聴きたいと思います。

ドイツにも最も暗い時代があり、その経験を語れる人々も高齢化しています。しかし、われわれは、それを語り伝える必要があると思っています。他の多くの国々でも同様の課題をお持ちだと思います。

ディスカッションにあたっては参加都市から短いプレゼンテーションをいただきたいと思っています。

フランスのジャン・ジョエル・レマルシャン様、お願いいたします。

### ジャン・ジョエル・レマルシャン （ショワシー・ル・ロワ副市長・フランス）

地獄のような光景をご覧になったという、内田様のお話を伺って、大変心を動かされました。止まっていたお父様の時計が思い浮かびます。腕時計のことを歌ったフランスの流行歌があります。「腕時計と壁に掛けられた時計の時間が違っていた。ここで何か奇妙なことが起こった。それは火の中で時計が溶けてしまったのだ」という戦争のことを歌った歌詞です。

人類は、そのような恐ろしい死を全人類にもたらす可能性がある存在なのです。そこで考えなければならないことがあります。私は、フランスのショワシー・ル・ロワという人口4万人の小さな町を代表していますが、小さな町の住民であっても、そのような恐ろしい可能性があることを感じなければならないと思います。プロパガンダとか政治的な議論を離れて、内田様のような方の苦しみとか悲惨な体験を忘れてはならないと思います。

アルチュール・ランボーは、恐ろしい人間たちが来ると詩に謳いました。今生きる人間は、その前に生きた人間が仕事を終えたところから始めるのだと、ランボーは言っているのです。そして、過去にそのような恐ろしい出来事があったことは、残念ながら事実ですが、その事実を後世に伝えていく勇気を持たなければならないと思います。今朝の式典でも、そのことが繰り返し述べられました。

市長も、それぞれの市町村の市民も、そう言った恐ろしい可能性に対する警戒を解いてはならないと思います。市民が参加し、市町村が参加し、自治体が参加することが重要です。平和市長会議の大切な意味は、市民が団結し、市民が共同して行動を起こす際のリーダーシップをとることにあると思います。われわれの市や周辺の都市でも、そう言った試みがなされています。

午前中の、非常に巨大ではありますが、どこか軽やかな雰囲気がある平和祈念像と、ハトが空を舞った光景から海の光景を思い起こしました。海はずっと続くものです。それから、平和祈念像はわれわれ人間同士を結び合わせてくれるものでもあると思います。大きな海のように、われわれの活動が大きく広がっていくことを望みたいと思いますし、その

ために活動していきたいと思います。

ありがとうございました。(拍手)

**議長 ステファン・ヴァイル (ハノーバー市長・ドイツ)**

ありがとうございました。

それでは、札幌市の中田博幸副市長にご発言いただきたいと思います。

**中田博幸 (札幌市副市長)**

皆様、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました札幌市副市長の中田でございます。今日は第7回目の平和市長会議分科会で、このようにお話しできる機会をいただきまして、ありがとうございます。

札幌市は日本の一番北にある北海道の道庁所在地です。人口は190万人で、日本で5番目の大都市になります。1972年に冬季オリンピックを開催していますので、ご承知の方も多いかと思います。

今日は、「未来を担う子どもたちへのメッセージ」という視点で、われわれの取組をお話ししたいと思います。

札幌市では、17年前の1992年に核兵器廃絶平和都市であることを宣言し、「戦争こそ地球環境を破壊する最大のものであり、平和にまさる市民福祉はない」との考えの下、被爆体験や戦争体験の共有を通じて、平和に関する普及・啓発を行っています。

特に札幌市は、日本の中でも、被爆地の広島・長崎から地理的に遠く、戦争被害も少なかったこともあり、一般の市民は「戦争」を知識としては知っているものの、直接見聞きする機会が少ないことから、現在の平和を「当然」と感じている傾向があります。そのため、被爆体験や戦争体験については、知識としての提供だけでなく、「実感として」伝わる工夫をしていくことが大切だと考えています。

そう言った意味で、昨年の北海道洞爺湖サミットの時期に、広島市、長崎市、非核宣言自治体協議会と共催で、「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」を開催することができたことは、非常に意義深いことでした。

各国首脳の間は叶わなかったものの、メキシコ駐日大使のほか、サミットを契機に札幌を訪れた多くの外国人や市民に、実際に原爆被害の写真や被爆の実物資料を通して、原爆の恐ろしさとともに核廃絶や平和の意義を伝えることができたと思います。また、期間中には、長崎からは被爆体験の紙芝居を市内各所で10回上演していただき、多くの市民や子どもたちに被爆者の生の声を届けることができました。

ここで、原爆展での市民の感想を紹介します。

「実際に原爆投下直後の街の写真を見て、また、焼け焦げた子どもの衣服やお弁当箱、瓦など、被爆資料を見たり、触ったりすることにより、これまで本で読んだ知識より、はるかに強く自分の内面に伝わった」。



「被爆者から直接、生の声で、過酷な被爆体験や、その後の偏見や差別など、心の傷を抱えながら生きてきたことを聴いて、これまで教科書で学んだ知識は何だったのかと思うくらい衝撃を受け、心の奥深いところで、戦争の悲惨さ、平和の尊さを実感することができた」。

「広島・長崎へ行ってみたい。行くべきだと思った」。

「初めて知ったことが多かった。自分の周りの人に、どんどん伝えていきたい」。

このような感想から分かりますように、リアルな原爆写真、被爆資料、被爆者の声は、多くの市民、子どもたちに実感として伝わる貴重な機会となりました。

札幌市ではこれを契機として、今後も被爆の実相を伝える原爆展や被爆体験講話を毎年開催し、より多くの市民にしっかりと伝える努力をしていきたいと思えます。

また、未来への継承としては、子どもたちに実感性のある戦争体験を伝えるとともに、平和な世界を実現するにはどうすればよいか、子どもたち自身が考える機会を積極的に設けていきたいと考え、実践しているところです。

札幌市の取組みとしては、毎年、戦争のない平和な世界に向けての思いを自由に絵や文章にして応募してもらう事業や、子どもたちを被爆地へ派遣する事業、インターネット同時中継により被爆者と交流する事業、戦争体験者から直接子どもたちに語り継ぐ事業、音楽や映画を通じて自然と平和について考えてもらう事業などを開催しています。

このように幅広く、平和について考える様々な機会を、未来を担う子どもたちに提供することにより、平和を目指す思いを育んでもらいたいと願っています。

最後に、広島市と長崎市のこれまでのご努力、ご献身に対して、心から敬意を表するとともに、核廃絶、平和な世界の実現に向けての取組みを両市だけにお任せするのではなく、札幌市を含む日本の都市はもちろんのこと、この会議に集められた世界の多くの都市の皆様と共に、しっかりとこの地で被爆の現実を見て、聴いて、実感して、自国の市民、子どもたちへ伝え、平和の機運を盛り上げていくことができたらと思っています。

ご清聴、ありがとうございました。(拍手)

#### **議長 ステファン・ヴァイル (ハノーバー市長・ドイツ)**

ありがとうございました。良い実例についてお話しくださいまして、うれしく思っております。

またフランスからの発表者をお迎えしたいと思います。美帆・シボさんです。よろしくお願いたします。

#### **美帆・シボ (フランス平和自治体協会 (AFCD RP)・フランス)**

皆様、こんにちは。私はフランスを代表しておりますけれども、今日は日本語でスピーチさせていただきます。

私はパリに隣接したマラコフ市で、1982年から原爆の実相をフランス語圏の人々に伝え

ています。最初は、日本で制作された原爆資料を広めたり、原爆映画「にんげんをかえせ」の上映をしたり、原爆写真展、被爆者の証言会を行ってきました。その後、フランスで原爆の本を3冊出版し、また、子どもの平和教育のために、日本語、英語、フランス語のアニメーション「つるにのって」を作り、世界の67カ国で上映しました。2005年にはNHK国際ラジオ放送がこのアニメをラジオドラマにして、24の言語で全世界に放送しました。

ご存知のように、フランスは核兵器を保有しています。ですから、原爆の事実を伝えることは容易なことではありませんでした。原爆を語ろうとすると、「日本人は南京で大量虐殺をしたのではないか」とか、「原爆を投下したおかげで戦争が終わったのだ」と言い返されることが随分ありました。

また、「ナガサキを知っていますか」と聞きますと、「ナガサキは公害の町だ」とか、「大きな地震があった町だ」という答えがよく返ってきました。2005年にパリの市庁舎で原爆展を行ったときは、「原爆がナガサキにも投下されたのか」と、二度目の原爆投下を知らない人たちがいました。

にもかかわらず、27年間もこの活動を続けることができたのは、フランス国内に原爆の実相を伝えたいと思う市民がいて、そして、市町村が頑張っているおかげなのです。とりわけ1997年にフランス平和自治体協会が創立されまして、たいへん大きな役割を果たしています。

しかしながら、原爆の被害は未だ十分知られていません。フランスの公式発表によれば、210回のフランスの核実験に関わった人々は、およそ15万人いますが、従事した人々の証言では、放射能に対する防備がほとんどされていなかったということです。また、核実験周辺の住民に対しても、十分な情報が与えられていませんでした。

たくさんの方が原爆の被害を正確に知っていたら、核実験に対しても警戒し、反対していたと思います。核実験の従事者は、何年も経ってから、悪性腫瘍や重病をいくつも併発し、既にたくさんの方が亡くなっています。

2001年になって、ようやくAVEN（核実験退役軍人協会）という核実験被害者の協会が創立され、元軍医によるアンケート調査があり、予想以上の被害があったことが明白になりました。この団体に続いて、ポリネシアの被害者団体「モルロア・エ・タトゥ」ができて、アルジェリア・サハラ砂漠フランス核実験被害者協会も連帯して、フランス政府に対し訴訟を起こした結果、政府は被害者に対する補償法を成立させざるを得ませんでした。しかしながら、今のところ、この内容では、被害者として認められる人々の数がかなり少なくなります。そこで、核実験被害者の会も頑張っているわけです。

核実験の被害者がとりわけ心配しているのは、彼らの子どもたちのことです。核実験に従事した後に生まれた子どもたちに先天的な異常や病気が多く、しかも、出生時から生後1年以内に死亡した子どもは、1000人に対して23.5人の率で、フランスの幼児死亡率の3倍以上になります。現在、健康上の問題がない子どもたちも、将来どのような病気が発生するか、核実験従事者や実験場の周辺の住民たちは、たいへん不安を抱えています。

私は彼らから、「ヒロシマやナガサキの被爆者はどうしているのか」「日本の政府はどのような援助をしているのか」「被爆二世、三世に問題はないのか」という質問をよく受けません。

今、世界にたくさんの被爆者がいます。フランスの核実験の回数に、アメリカの 1053 回、ソ連とロシアの 738 回を加え、更に他の国々で行われた核実験の回数を加えますと、2009 年 5 月までに、少なくとも 2099 回の核実験が行われました。しかも、大気圏内で実験された水爆の爆発力は、多くが広島型原子爆弾の 800~1000 倍でした。

核兵器を使用しなくても、製造から実験の段階で、既に地球の環境を汚染しています。そして、被爆者を生み出してきました。戦争や核兵器は、環境破壊の最も大きな原因の一つになっています。地球環境を守り、より平和な世界を築くためにも、原爆や核実験による被爆者の証言を、もっと若い世代に伝えていくべきです。

今年の 9 月 21 日は、国連が指定した「国際平和デー」で、これから 1 週間、マラコフ市では核兵器廃絶のためのキャンペーンを行います。これからも平和市長会議の様々な国と協力して、こうした活動を続けていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

ありがとうございました。(拍手)

#### **議長 ステファン・ヴァイル (ハノーバー市長・ドイツ)**

ありがとうございました。美帆・シボさんは、フランス、日本において非常に重要な協力者であることが分かりました。

ここで 15 分休憩を取り、リフレッシュしていただいて、3 時 15 分に再開します。どうもありがとうございました。

(休憩)

#### **議長 ステファン・ヴァイル (ハノーバー市長・ドイツ)**

それでは、ニュージーランドのワイタケ市のロバート・ハーヴェイ市長にご発言をお願いいたします。

#### **ロバート・ハーヴェイ (ワイタケ市長・ニュージーランド)**

キア・オラ・タトゥ。ハレ・マイ、ハレ・マイ、ハレ・マイ、ティキ・マイ、……(皆さん、こんにちは。ようこそ、ようこそ、ようこそ、……) ニュージーランドのマオリの古代語でご挨拶を申し上げます。

私は、これまで 55 年ぐらい平和のための運動を行ってきました。私は生まれながらの平和主義者なのです。1950 年代私が 10 歳ぐらいの時、初めて反核のためのデモに参加したぐらいです。

今回、ここにお招きくださいましたことを、とてもうれしく思います。そして、内田さ

んに感謝申し上げたいと思います。今日は被爆証言を聴かせていただきましたが、生きていらっしゃる方が語るものとしては、私が今まで聴いた中で最も悲惨なお話であったと思います。私は、お話を聴きながら原爆の匂いを嗅いだように思いましたし、恐怖を感じましたし、その血が見えるように思いました。本当に生きている宝だと感じました。だからこそ、われわれが生きている間に、実際に経験された方の話を聴くことがとても重要だと思います。生きているドキュメンタリーで、われわれにとっては本当に貴重な存在であり、それをわれわれは忘れてはならないと思います。

内田さんは、21世紀の世界をどう考えていらっしゃるのかと思いました。そして、64年前に原爆を経験された内田さんと同じ年齢の今の子どもたちのことをどう考えていらっしゃるのかと思いました。今の子どもたちにその証言を語り伝えることがとても重要だと思います。

私は、ニュージーランドの人口20万人の大きな都市の市長で、暴力の撲滅に随分力を尽くしてきましたが、子どもたちは、色々なところでビデオゲームに興じて、暴力にさらされています。しかし、内田さんのお話はゲームではなく、現実です。内田さんの流した血、友人が流した血や火傷を負った皮膚は現実のものです。今日のお話を聞いた子どもたちは、生命を尊重するようになると思います。子どもたちは、ビデオゲーム、映画、インターネットにさらされて暮らしており、こうした媒体にあおられて子どもたちは自殺をしています。先住民の方々も自殺が多いです。

ですから、こういうストーリーを、内田さんが原爆を経験された年齢に達している子どもたちに伝える必要があり、われわれにはその責任があると思います。私にとっては、内田さんは高齢者ではありません。これまで私がお聞きした原爆の体験で高齢者になってからの体験が語られたものはありません。若い人が体験したことを語ったのです。若い人が若い人に伝えることが重要だと思います。被爆体験の語り手は、体は80歳かもしれませんが、若い日の体験をそのまま語っていたのです。

私は、共感のルーツという運動をしています。赤ちゃんから学童に至るまでの子どもたちのプロジェクトです。例えば、生まれて1カ月の赤ちゃんを学校に連れてきて、母乳を与えられたり泣いたりしている赤ちゃんを子どもたちに見せます。3カ月経ったら、また連れてきます。赤ちゃんはその間に大きくなって、随分動くようになったと子どもたちは思います。6カ月後にまたやって来ると、ただわめくだけでなく這い這いをしますから、子どもたちは、本当に生きて成長している人間なんだと感じます。9カ月になると、もう歩いています。そうやって学校の子どもたちと赤ちゃんが本当に素晴らしい経験をします。子どもたちに、赤ちゃんは揺すぶったり、落としたり、こんなことをしてはいけないということを学ばせるのです。今世界では赤ちゃんを揺すぶっている人が随分います。

ニュージーランドでは、子どもとはどういうものなのかと言うように、生命を認識することが重要視されています。また、生命の大切さ、心を揺さぶる体験、戦争の恐ろしさについて、今日ここでお聴きしたようなお話をどうにか翻訳して子どもたちに人類の悲劇を

伝えていきます。そうしないと、今日聴いたようなことがまた起こるのではないかと思います。未知の貴重な生命が戦争の中で一瞬にして失われてしまうということが起こるのではないかと思います。

私には6人の子どもや孫たちがいますが、子どもたちは、過去の悲劇を理解することができます。ですから、このような活動をきちんと行っていかなければならないと思います。20万人が私を市長に選んでくれているので、その責任もあり、私は、彼らに対してきちんと対応しなければなりません。

また、いじめ撲滅プロジェクトもあります。子どもたちは色々な方法で他者をいじめたりしますが、これはとても危険なことです。これを放置しておくと、恐ろしいことが起こるでしょう。

平和というものは、われわれが意志を持たなければ実現しません。われわれが育めばこそ平和は育つのです。私が50年以上もずっと行ってきていることは、そういうことです。私は日本にも中国にも行き、平和について語っています。10歳でデモ行進に参加した時には思いもよらなかったことです。

内田さん、私は今、戦争にうろたえています。こんなことが実際に起こったのだと。最後に、なぜ私はこのようなものを持っているのでしょうか。これは松明です。今日、これに火を点け、ニュージーランドの人たちと共に松明を掲げました。今は消していますが、長崎の平和の火、ギリシャの火をここに移し取りました。ニュージーランドでは10月にワールドマーチが行われますので、長崎の炎をニュージーランドに伝えたいと思います。そして、ここから始めて世界中を回りたいと思っています。北米のネイティブアメリカンの人たちがこの松明を作り、マオリの人たちも松明に飾り付けをする予定です。行進に参加されれば、皆様、ご覧になることもあるかと思います。

とにかく私は常にそういう話を伝えることを心掛けていきます。内田さんのお話は、われわれが伝えますので、絶えることはありません。あの日、ご家族を亡くし、ガラスでサグサになった体で生き続けた内田さんの言葉をこれからも伝えていきたいと思っています。

どうもありがとうございました。

#### **議長 ステファン・ヴァイル (ハノーバー市長・ドイツ)**

ありがとうございました。素晴らしい感動的なスピーチでした。

ここで、皆様からのご発言をお受けしたいと思っています。会場のどなたでも結構です。ご意見がございましたら、どうぞ。

#### **エスティファノス・アフォワキ・ハイレ (エリトリア駐日大使・エリトリア)**

ご参会の皆様、この重要な会議において、私はエリトリア駐日大使としての立場だけではなく、一人の高齢者として、また、エリトリアの首都、アスマラ市のテウェルデ・ケラティ市長、2008年に平和市長会議に加盟したマッサワ市のファナ・テスファマリアン市長

の代理として発言させていただきます。

第7回平和市長会議総会は、かつてないほど気候及び核問題がますます深刻になっているこの時に開催されていますが、まずは日本政府、日本国民、この重要な会議の参加者の皆様に、両市長のメッセージをお伝えしたいと思います。

私は、1947年にエリトリアの首都アスマラで生まれました。広島や長崎の爆心地から遠い場所ではありますが、私の幼少時代の記憶として、悲惨なニュース、悲惨な写真、悲惨な記事が残っており、それは私の魂に深く刻み込まれました。それは今でも傷跡になっており、それが、現在我が国に存在する人道に対する大きな疑念につながっています。

このため、私には、アスマラ市、マッサワ市、そして私の世代を代表して発言する義務があると思います。この重要な会議において、たとえ短くとも、核兵器の歴史を思い出し、振り返ることが大切だと思います。人類は過去の過ちに学ばねばなりません。この会議の参加者の皆様に私と我が国の国民の身近に起こった二つの歴史的事実についてお話したいと思います。

一つ目は、1960年2月14日、フランスは、アフリカのサハラ砂漠で広島に落とされた原爆の4倍もの威力を持つ大気中核実験を行いました。この出来事は、フランスのシャルル・ドゴール大統領にとっては喜ばしいことでしたが、われわれの住む地域や隣国に非常な悲惨な結果をもたらしたことを申し上げたいと思います。

この実験との因果関係が科学的に証明されたわけではありませんが、私の子ども時代に、人々が原因の分からない疾病に悩まされ、理由の分からない様々な病がはびこり、多くの子どもたちや高齢者に老若男女を問わず影響が出ていました。多くのアフリカ人を病に追いやり、何週間も何カ月間も病床につかなければならない人々がアスマラにもいました。サハラ砂漠から熱い砂嵐が押し寄せ、インド洋からの湿気を含んだ風とぶつかり、雨を降らせませんが、核の灰がこれに加わり、地域全体に影響を及ぼしたのです。フランスは続けて17回の大気中核実験を行いました。

フランスには、大気中の核実験が環境に対して、人々に対して、生態系に対して、どういった恐ろしい影響を及ぼしたのか、十分認識してもらいたいと思います。

アフリカ大陸は植民地時代の奴隷制度においても、大量破壊兵器によっても非人道的な経験を味わい、このように静かな形で影響を受けてきたのです。

二つ目に、冷戦時代の1980～1990年、マッサワ市とその周辺はソ連によって打撃を受けました。ソ連の赤の艦隊が占領したのです。ダフラク諸島にソ連の海軍基地が置かれ、1990年、ソ連と冷戦時代の同盟国エチオピアは、エリトリア独立運動により、ダフラク諸島と紅海沿岸の支配権を失ったのです。マッサワの港湾都市は、1990年、エリトリア人民解放軍によるフェンケルの戦いでの勝利によって、ソ連の潜水艦をダフラク諸島から追い出し、非核地帯となりました。

アスマラ市とマッサワ市は、核兵器や大量破壊兵器の脅威にさらされ、ほとんどの家族がその影響を受けた身内を持っています。

2008年10月10日、日本の被爆者とマッサワ市の戦争被害者がマッサワ市で会議を開きました。この会議で、自身も戦争被害者であるマッサワのテストファマリアン市長は、平和市長会議への加盟を発表しました。会議の中で、1990年のマッサワ市の空爆のニュース映像が上映され、空爆を経験したマッサワの若者が被爆者に自らの体験を語りました。被爆者は、まるでそこに原爆資料館が移動してきたかのように、写真や原爆で破れた衣服など様々な資料を展示し、直接マッサワの若者たちに被爆体験を証言しました。

改めまして、これからもアスマラ市とマッサワ市は、核兵器と全ての大量破壊兵器の廃絶を目指していくことについて、この場で皆様にお話しできることを光栄なことと思っております。

2008年3月25日に毎日新聞が報道していますが、エチオピアの首都アジスアベバから150キロのホルマット兵器工場で北朝鮮が核兵器を開発しているということです。現在あるいは将来に亘って、こういった兵器を使うことが許されるならば、第二次世界大戦でムソリーニが東アフリカ地域の人々に行った残虐行為が繰り返されることとなります。

最後に、オバマ大統領の核兵器についての演説は、歓迎すべき変化の兆で、われわれ全てが支持しなければなりません。また、2009年、IAEAの事務局長に日本の方（天野之弥）が就任します。この二つの事柄は、持続可能な開発、気候変動の問題解決、核兵器廃絶へ向けて、大きな機会になると思います。

最後に、「剣で他人を傷つけた者は、その行為を忘れられる。しかし、傷つけられた者は、そのことを決して忘れない」というわれわれの昔からの言い伝えを紹介して終えたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

#### **議長 ステファン・ヴァイル （ハノーバー市長・ドイツ）**

ありがとうございました。大変素晴らしいご発言でした。アフリカにはわれわれがあまり知らない政治的な色々な事情がありますけれども、そういう経験を語って下さったことは、われわれにとって非常に貴重なことだと思います。これまでに行われた色々なことが、多くの国で忘れられることがありますので、それを思い出させて下さったことも、とても良かったと思います。

どなたか、ご発言はございませんか。特になければ、まとめたいと思います。

#### **まとめ**

#### **議長 ステファン・ヴァイル （ハノーバー市長・ドイツ）**

最初に、今日は本当に幸せな時を過ごせたと思います。内田さんから、またとない導入部のお話をしていただき、本当にありがとうございました。改めてお礼申し上げます。

二つ目に、最も重要なのは、若い人たちの参加で、若いうちの平和教育は絶対に必要なことです。この点から、色々な国で行われていることをお話し下さって、とてもうれしく

思います。例えば、ロバート・ハーヴェイさんは、学校に赤ちゃんを連れて来るというプログラムをご紹介下さいましたが、とてもおもしろいと思いました。ハノーバーに戻り、私の周りの専門家と、ニュージーランドのこの考えを生かせないか検討してみます。ありがとうございます。

平和教育はこれからも続ける必要があります。それは、私の息子の世代はインターネット世代であることと関係があります。戦争のゲームが随分出回っていますが、平和のゲームはありません。暴力のビデオはありますが、平和を描いたビデオはありません。ですから、どの国もそうですが、IT革命の時代にあって、平和教育をどうすればいいのかということこそ是非話し合わなければなりません。学校や幼稚園は、今までになく重要な場になってきていると思います。ドイツの経験に照らして言うなら、家族だけに任せることはできません。このトピックは、平和市長会議の重要な討議項目に入っています。これは、今回の総会だけでなく、将来においても努力すべき重要なテーマだと思います。

## **閉会**

### **議長 ステファン・ヴァイル (ハノーバー市長・ドイツ)**

皆様、今日は参加して下さいまして、ありがとうございました。それでは、これで分科会 I を終わりたいと思います。(拍手)